

## 大友氏遺跡を活かしたまちづくりへの取り組み

玉 永 光 洋

## 一、プロローグ

平成十三年八月十三日、大友氏館跡が国の史跡に指定されたことは、マスコミに大々的に報道され、その年の大分市一〇大ニュースの中にランク入りした。その反響の大きさについては「館跡の指定は、中世、九州における雄都として、また南蛮交易の地として輝いた豊後府内の実像把握と解明を大きく前進させようとしています。」大友氏と、そして宗麟は、おおいにの地に生まれ育ち、住む者たちのみはてぬロマンで、その姿をよみがえらせてくれる史跡整備と大分市のまちづくり事業は、二十一世紀のメモリアル・プロジェクトと言えらるであろう。この大事業は、途方もなく長い年月と、予想をこえる官・民共同、知と財のエネルギーの集中なくしてはなしとげない、多くの困難をとまなう宮為であることはいまでもありません。」と語られた大友遺跡検討委員会の長谷目源太委員長の言葉がすべてを物語っていると見えよう。

かつて夢を追い求めた「とてつもないロマンチスト」がいた。アイデア市長との称号をもつ上田保元大分市長である。豊後府内が西洋音楽や病院、育児院発祥の地といった経緯から、二期目の昭和二十七年に、顕徳町のデウス（ダイウス）堂跡に、当時のデウス堂を復元し、その横にキリシタン関係資料を所蔵・展示する博物館を建設する「デウス堂跡記念公園建設計画」を打ち出し、三期目には「キリシタン文化センター」と改称し、財源は、当初の計画であった豪華なキリシタン・ペンシルか

ら変更した竹製ロザリオを製作し、ローマ法王庁の協力をえて全世界のキリスト教信者に買ってもらおうといった斬新な手法であった。「むーかし、大友宗麟公が…」の歌詞とメロディーを、わたしたちの父親の世代は、昭和の少年期に合唱しつつすじしたと聞く。宗麟公がひろく市民に慕われていたことを伝えてくれる話である。上田元市長は市民のロマンを鋭く感じとっていたのであろう。しかし、この壮大な夢は現実のものとはならなかった。『ロマンを追って―元大分市長上田保物語』 大分合同新聞社 二〇〇三)

大友氏がふたたび脚光をあびるきっかけは、昭和六十二年の『大分市史』の刊行である。昭和五十九年に新たに見つかった戦国時代の中世大友城下町を描いた「府内古図」をもとに、明治時代の地籍図や地名などを手がかりにして、大分川河口左岸の微高地に形成された(今の錦町・顕徳町・元町一帯にあたり、南北約二・二km、東西約〇・七kmの範囲)四一ほどの町々、そのほぼ真中の一辺約二〇〇m四方の大友館跡、倉庫群の建ち並ぶ蔵場跡、菩提寺万寿寺跡などを地図上にみごとに復原したのである。この刺激的で挑戦的な試みは、その後の大友氏の都市づくり研究におおきく影響を与えることになる。

「大友館に大庭園」・「中世のロマンに浸る―約五〇〇人の歴史ファンが詰めかけた現地説明会―」などの文字が新聞紙上を飾った。平成十一年のことである。大分市史での試みは、考古学的手法で花開いた。大規模庭園跡の発見は大友氏館跡の全体指定へと方向性が定まり、平成十三年の部分指定へとつながった。わたしたちの住むおおいた、そして日本の歴史にとってかけがえのない文化遺産をまちづくりに活かしていくためのさまざまなプロジェクトがふたたび動き始めた。

## 二、地下からのメッセージ

### まちの脈わい

南蛮の都として輝いた時代、「府内」大分は東九州の雄都として不動の地位を築いたようすが、今地下から寄せられている。

大友氏は、鎌倉時代から戦国時代のおよそ四百年間、豊後國の主として君臨し二三代続くが、その歴史が最も色鮮やかに映え

るのが宗麟の時代であった。二一代当主として北部九州六国を手中にし、西国最強の戦国大名となった人であり、ポルトガル、中国、朝鮮、東南アジア地域と貿易を営み、フランシスコ・ザビエルを招いて、キリスト教の布教を許した。もっとも、宗麟がキリスト教に近づいたほんとうのねらいは、直接的には火繩銃などの軍用物資の入手であり、南蛮貿易と宣教師はセットであった。

ルイス・フロイスは「およそ八千戸の家があり、臼杵の城（丹生嶋城）から約一ニマイル離れ、この町は豊後の中心的町である。また、府内に近く三千（歩）離れたところに、沖の浜と言われる多数の船の停泊港があり、府内の外港として機能していた。」と府内のようなすを伝えるとともに、イエズ会士の通信によると「豊後の市」とあり、京・堺・博多の商人が来往して取引を行う場所であった、とも記される。府内には、あふれるほどの南蛮の品々もたらされていた。中国や朝鮮の陶磁器に加え、タイ・ベトナム、ミャンマーといった東南アジア産陶器等々、その多彩さと豊かさに目を奪われる。まさに物資の集積する商都として大いに賑わっていた情景が、平成七年から始まった発掘調査によってわかった。

#### 將軍邸をモデル

絵図よると、東に礼門と脇門の二つの門が描かれ、調査では東南隅に配置された庭園跡、北辺の館を囲む街路に面した築地塀跡、中心部の礎石を使ったと思われる大型建物跡などが見つかり、室町將軍邸や細川管領邸と多くの共通性があることがわかった。

およそ「ぞうりむし」の形をした庭園跡は、最終段階では、東西二六・六m、南北一六・六m以上、深さ二mほどの大規模な池であった。岸辺には松や白い玉砂利で飾られ、石組された護岸、安山岩製の巨石を使った景石、滝石組が置かれ、大友氏の格に相応しい見事な庭園が復原される。

祭事など儀礼につかったカワラケ、茶器類の出土は、庭園の近くに連歌や茶の湯、花、香などの遊芸や文芸の寄合、饗宴などをを行う会所があったことを雄弁に物語っており、大友氏は室町將軍を頂点とする規範の世界を忠実に現していた。

## 南蛮の香るまち

意外と思える町屋域から最古のヴェロニカと聖母子像を描いたメダイとガラス製のロザリオの珠（コンタ）が見つかった。教会に足繁くかよい、祈りをささげた信徒の姿とその広がりをはうふつとさせてくれる。天文二十年（一五五二）七月、ポルトガル船が府内に入港し、翌八月にはザビエルが周防山口から府内に入り、キリスト教の布教が許可される。ポルトガル船の入港は永祿三年（一五六〇）までの計五回を数え、宗麟も大型船を仕立て私貿易を盛んにおこなった。府内にはダイウス（デウス）堂と呼ばれる府内教会、ベランダのある西洋式病院、府内コレジオという学校が設立され、西洋音楽も奏でられるなど、ヨーロッパの香りをにじませたまちへと変貌していった。また、唐人町という明人やポルトガル人が住んでいた外国人居住区もあり、商人や職人とともに修道士や司祭など宣教師の起居するところもあった。キリシタン遺物の出土は、こうした諸施設の発見をも予感させるものである。

## 京都的なまち

府内の町並は、絵図と地籍図を重ね合わせると、南北に四本、東西に五本の街路が通り、およそ方形に区画された中に木戸で囲まれた短冊型の両側町が復原できる。町を区画する道路跡は、十数地点で確認され両側に側溝をもち、きわめて丁寧に舗装された幅は約六m、約一〇mほどの道路であった。

府内古図によると大友館東側の正面部には、南北道路を挟んでふたつの町が描かれ、館の正門に通じる東西道路を境に、北を桜町、南を御内町と記され、北と南の交差点には木戸が表現されている。大分県教育委員会がおこなった発掘調査で、館の正面に付設された南北・東西道路跡とともに町屋跡が見事に姿を現した。戦国時代後半に建設された桜町跡では、通りに面して広い空間をもつ角地の屋敷と間口が小さく奥行が長い空間のなかに、表一列の建物群が居並ぶ状況が復元される。

木戸跡に接する角地の屋敷には礎石を使った建物跡、池状遺構、青銅炉跡などとともに、商人屋敷を示すいろいろな分銅やガラス製品、青銅製飾金具、犬形土製品、上質の貿易陶磁器など多彩かつ豊富な品々が見つかった。府内の大豪商仲谷乾通・

宗悦の父子は、戦国末期に西国一の財力をもち、とくに宗悦は、宗麟の厚い信任を受け、豊臣秀吉への使者として活躍し、政商的な地位を得た。こうした豪商屋敷が存在したことを示すのに十分な内容である。

また、府内の町で商取引に使われる代銀を、天秤を使って計量する「計屋」と称す商人がいた。大友氏の重臣田原紹忍の書状では、上市町に居住する岩田与三衛入道の名がみえ、豊前の上毛・下毛郡から府内に訪れる商売人は、彼のもとに荷卸しするよう指定されていた。桜町跡や御内町跡、林小路町跡出土の繭形・太鼓形といった各種分銅や権（銅錘）、横小路町跡出土の銅製天秤皿など計量に関わる道具類の存在は、計屋商人の活動のようすを端的に表す事柄だ。さらに、横小路町の酒・油・藍（染物）などとの関連を暗示する備前大甕を埋設する倉跡、銅細工関連遺構やとりべ、桜町跡・御町跡の鍛冶に関連するふいご羽口やるつば、鉄さいなどは、多くの職人が居住していたことを意味している。

ところが、桜町南側の御内町跡の様子は少し趣がちがっていた。屋敷裏を溝と石積みによって区画される広い空間が復原され、館にみられるカワラケの大量廃棄などのありようは商家や町屋とは違い、武家屋敷の可能性を強くする。

府内の町は、館の正面の一等地においても武家地と商業地が混在する状況がわかってきた。その景観は「洛中洛外図屏風」に描かれる戦国期の京都の町並みとよく似ている。

#### 港・館・城

大分川の河口に府内の外港「沖の浜」（現在の春日神社あたり）があった。この「おきのはま」と同名の貿易港は博多にもある。「息浜」がそれである。博多は、古代より対外交易の窓口として発展し、戦国時代には大友氏が支配して、この息浜を拠点に朝鮮や中国。琉球との貿易を盛んに進めた。大友氏が関係する同じ名前の貿易港は、歴史的にみると博多息浜の開発が早い。鎌倉時代後期の元弘三年（一一三三）六代貞宗の時、建武政権（後醍醐天皇）から「勲功之賞」として息浜を給付されて以来、息浜の経営を行一一五世紀の後半には、日朝・日明貿易の重要な拠点となっていた。ところが、大内氏（政弘）が豊前・筑前を回復すると、大内氏の博多支配が始まり、天文七年（一五三八）室町幕府の仲介で大友氏と大内氏の和睦が成立し

た後も、大内氏は占領を続けた。幕府の命令によってようやく息浜は大友氏（義鑑）に返付されることになるが、この間大友氏は、事実上博多経営ができなかったのである。

息浜経営の不振は、大友氏の海外貿易に大きな打撃を与えたことは想像に難くなく二〇代義鑑は、府内の建設にあたって博多息浜に代わるような安定した貿易港を強く望み、息浜と同様な性格や機能をもった町をイメージして、府内を建設したと考えられる。宗麟の時代も、毛利氏と博多をめぐる壮絶な争奪戦が繰り広げられ、不安定な時代が続いた。博多と同じ呼び名の存在意味はそのあたりにあるのかもしれない。

大友氏館跡及び府内町跡には、戦国時代の館や都市にみられるような館や町を囲う堀や土塁、総構えといった大規模な防御装置は見受けられない。一般的に戦国時代は、平地でつくられた方形型の館と山城の城郭とが組み合わさって使われ、政治や生活機能を方形館に、軍事機能を山城に機能分化していたとされる。この特徴は大友氏にも言えることであるが、その内容は少し複雑である。すなわち、顕徳町の大友氏館跡と南の上野丘陵に築かれたもう一つの大友氏館と言われる「上原館跡」、さらに、西方約一〇kmのサル山として知られる高崎山に築かれた山城「高崎城」の存在である。上原館跡の構えは、平地の館とは打って変わって大規模な土塁と堀をもつ極めて防御性の強い約方一町の方形館であり、高崎城跡は、天然の要害を巧みに利用し、主郭を中心に曲輪を連ね、要所の石積み、虎口の内枘状の空間、大規模な堀切と横堀、外縁部の畝状空堀群など中央と在地の技術の粋を結集した山城である。

大友氏は、外港としての沖の浜、経済性を最優先する府内の町、防御機能を備えた上原館そして武士としてのシンボルであり最終的な詰め城としての高崎城といったように、それぞれの施設に機能を分けて、城館を核とする中心網の整備を行ったのである。

### 島津の爪痕

南蛮の都そして東九州の雄都として輝いた豊後府内、その輝光の数々があざやかに甦ろうとしている。しかし、こうした繁

栄の姿ばかりを物語るものではなかった。大友氏館や町屋域での火災層や火災処理穴、火を受けた遺物群、さらには館庭園跡の破壊の爪痕などは、天正十四年（一五八六）十二月十三日（島津史料）薩摩の島津軍が府内に攻め入り、町を焼き払ったとする記録と符合する。

江戸時代の初めころから造られた水田層を取り除くと、戦国時代の遺構群が姿を現す。桜町で見つかった二棟の建物跡は全面焼土で覆われて、土壁の倒壊状況も見られた。あたかも焼け落ちたかのようなのである。火災処理の穴は、道路に面する建物の裏側に集中して掘られる場合が多く、焼土とともに火を受け使えなくなった品々が埋められている。横小路町跡の埋設護の上半部は、削平されてなくなっていたが、中には焼土に混ざって多量の焼けた陶磁器類が入っていた、これも大甕を使った火災処理の痕跡である。

庭園跡の状況は興味深い。池の中には故意に割れた石が、二箇所にとまって捨てられており、護岸の石組は部分的に破碎され、庭を飾った景石も抜き取られたり、倒されたりしていた。石の多くは火を受け、こうした遺物も池の中から数多くみつかっている。庭は、作庭されて百年ほどでその機能を終えたのである。その終焉の姿は、豊後戦国史の陰影を生々しく今に伝えている。

#### 復興と移転

宣教師の手紙の発信基地（かみ川畿内、しも川長崎・ふない）としての顔をも持ち、遠くヨーロッパまで知られた府内は、島津氏の豊後進攻で大打撃を受けたが、二三代義統によって復興をみたであろうことが天正十六年（一五八八）の「伊勢参宮帳」は伝える。焼き討ちによる災害ゴミ（不要となった物品）を埋めた無数の穴、焼土の入った整地層など、復興作業の痕跡はそれを物語るが、どの程度の復興であったかはこれからである。

島津氏の豊後進攻は、秀吉の九州入りで終り、大友氏は豊後一国の大名となるが、文禄の役（一五九二）での失態がもとで翌年豊後を没収され、大友氏四百年余の時世は終わる。その後、秀吉大名の手によって、大分川河口が埋め立てられ、近世府

内城とその城下が建設された。現市街地の中心部がそれである。中世の町の大半はこのとき移転している。外港沖の浜は、慶長の地震（一五九六）で沈んだ以後、再建されなかった。沖の浜のもっていた町としての機能が近世城下町のなかに吸収され、もはや沖の浜を再建する必要がなかったのであろう。

大友氏館の庭園も埋められる。長方体の石材を割取るうとした矢穴痕跡のある景石、抜き取られた護岸石や景石の状況は、単に焼き討ちされ破壊されたことのみを意味しない。秀吉大名による破却、新城石垣への転用など旧体制への否定と新政権誕生ドラマの一端がそこには秘められている。（『日本の中世月報』一 第二巻付録「南蛮の都として輝いた豊後府内の盛衰」中央公論社 二〇〇二を一部修正して掲載）

### 三、動き始めたさまざまな取り組み

#### 大友氏検討委員会の設置

平成十一年、大友氏館跡の保存整備及び大友氏館跡を中核としたまちづくりに関し、総合的に検討を行うため、大友氏検討委員会を市長の諮問機関として設置され、補佐する内部プロジェクト組織（一課一四名）も併せて設けられた。委員会のメンバーは、大分市政策アドバイザー二名、学識経験者三名、観光・街づくり代表四名、地元代表二名、行政機関二名の計一三名で構成され、事務局を教育総務部文化財課が担当することとなった。

目的は、① 都市計画（街づくり）上における中世大友氏遺跡の今後の取り扱いについて、総合的に検討し十分調整を図ることを目的に検討委員会を設ける。② この検討機関は、市役所内部のプロジェクト及び専門家を含めた市民各層からなる委員をもって構成する。③ この委員会は、日本の歴史とつながりがえのない文化遺産を、大分市の大切な資源として活用していくための方向性を示し、市長に意見を述べるものであった。

三カ年、計六回の審議（山口大内氏館などの視察と市民団体との意見交換会を含む）の結果、都市に生活する市民の価値観



も多様化している中、地域の歴史資産に触れ、感じることをできる「場」としての空間を街づくりに反映させることが、きわめて重要であり、歴史資源の情報発信を行い、市民の十分な理解とその活用が大切であるとの総意から、歴史を活かしたまちづくりの目標に「地域の歴史と文化を知り、愛着と誇りを育む資産づくり」を掲げ、その達成のため行政機能と民間の活力を最大限活かし、それぞれが連携し、効率的・効果的な施策としていく三つの活用指針が提言され、各活用指針に沿った短・中・長期計画と具体的な検討メニューが示された。

## 歴史を活かしたまちづくりの目標

「地域の歴史と文化を知り

愛着と誇りを育む資産づくり」

- 官・民が強調して行う生活に根付いた歴史資産の保護
- 教育、日常生活、経済活動に、市民が活用できる資産
- 地域アイデンティティの創出（新たな精神的支柱の再生）

### 活用指針 1

「歴史を活かしたまちづくりの視点」

○住民の協力を得た都市整備に係る視点

「各時代の歴史の取扱いと現代施設との調和」

○遺跡の保存・復元・教育上の利用等に関する視点

「市民・来訪者への理解を深める調査と復元」

○広報活動と市民連携、経済活動への視点

「市民が参加する様々な事業の機会創出」

### 活用指針 2

「整備エリアの設定」

### 活用指針 3

「短・中・長期計画の設定」

## 意向調査

遺跡保護の方向性を探るため、関係住民を対象とした意識調査を平成一一年度に実施した。全体として史跡指定についてはほぼ半数近くの人（四三・二％、この内地権者に限定すると四六・〇％）が同意するとしており、反対する人は一六・二％（同一八・四％）と少ないものの、あとはわからない（二五・一％、同三三・三％）と答えていることから、指定の意義、指定後の規制等について、十分な説明と理解を得る必要性が浮かびあがった。

なお、条件が整えば協力すると答えた人では、適切な金銭補償を要求する人が最も多く、その次に代替地や生活環境がかわらないことなどをあげた人が多かった。

## 市報おいた特集号

文化庁から大友氏館跡の国史跡指定の方向性が示されたことにより、大分市は、一、館跡の範囲確認調査の実施。二、関係住民を対象とした意向調査の実施。三、大友遺跡検討委員会の設置等を行う旨のお知らせとともに、大友氏館跡や大友宗麟について広く理解していただくため、マンガ「英傑豊後王大友宗麟」や館跡などの発掘調査成果を紹介する市報特別号を平成十一年八月十五日に発行した。

## 遺跡現地説明会

平成七年度から始まった大友氏館跡及び中世府内町跡の調査成果について、市民の皆さんにつぶさに公開するため、毎年県・市合同で現地説明会を実施しており、毎回数百人の参加がある。

## 中世大友再発見フォーラム

大友氏館跡の国史跡指定を記念し、フォーラム二〇〇一「南蛮都市府内再発見」を開催した。あらたな調査成果と文化財を活用したまちづくりについて広く市民に公開し、大友氏館跡を全国に発信するとともに、事業の推進に理解を得ることを目的とした。

内容

大分市・大分市教育委員会・中世都市研究会の主催とし、大分県教育委員会・大分県立先哲資料館の共催で実施。期日は平成十三年九月一日(土)～二日(日)。併せて八月二十五日(日)～八月三十一日(金)にかけて「大友週間」と銘打ち各種イベントが行われた。

①中世大友再発見フォーラム

九月一日(土)

◆遺跡現地説明会(午前)

◆記念講演(午後)

- ・石井 進(東京大学名誉教授)「南蛮貿易都市の軌跡」
- ・小野正敏(国立歴史民俗博物館)「戦国時代の館その景観と機能」

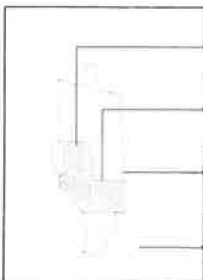
◆公開シンポジウム(午後)「大友復活・地域活性・住民

参加・街づくり」

【パネリスト】

- 木下敬之助(大分市長)
- 長谷目源太(大分市市政アドバイザー)
- 石井 進(東京大学名誉教授)

整備エリア別活用例

整備エリア	主要施設・地名	施設(活用)	活用イメージ
	大友の館	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
	大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
	中世大友再発見フォーラム (大友の館(大友正敏・小野正敏))	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
	中世大友再発見フォーラム (大友の館(大友正敏・小野正敏))	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)
大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)	大友の館(大友正敏・小野正敏) 大友の館(大友正敏・小野正敏)

加藤 允彦 (文化庁記念物課)

高瀬 忠重 (山口県立大学教授)

松村紅実子 (ふらんすこ代表)

【コーディネーター】

姫野清高 (大分市観光協会事業活動委員会委員長)

九月二日 (日)

◆中世都市研究会「南蛮都市・豊後府内―都市と交易―」

・坂本喜弘 (大分県教育委員会) 「考古学から見た中世大友府内町の成立と構造」

コメント 玉井哲雄 (千葉大学)

・鹿毛敏夫 (大分県立先哲資料館) 「文献・絵図からみた大友館と府内の町」

コメント 山村亜希 (京都大学)

・高畠 豊 (大分市教育委員会) 「戦国時代豊後府内の貿易陶磁器」

コメント 森本朝子 (福岡市教育委員会)

・大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館) 「陶磁貿易からみた東南アジアと日本・豊後」

コメント 佐伯弘次 (九州大学)

◆その他 出土品の展示・資料集の作成・大友関連のビデオの上映

②「大友週間」行事 (イベント)

・「大友河原市」 八月二五日

・「高崎山 (城) 登山」 八月二六日

- ・「府内発宗麟バスツアー」 八月二十六日～二十八日
  - ・「宗麟文庫」(コンパルホール) 八月二十八～九月二日
  - ・「宗麟茶会」(コンパルホール) 二十九日・三〇日
  - ・「大友ウォーク・ピングゴで歩く南蛮都市府内」 八月二十九日・三〇日
  - ・「夏休み特別連続講座」(歴史資料館) 八月二十八日～三十一日
- ③その他の行事

・特別展「大友府内―よみがえる中世国際都市―」

【場 所】 大分県先哲史料館

【開催期間】 平成一三年八月二三(木)～一〇月六日(土)

【主 催】 大分県教育委員会・大分県先哲資料館

④よみがえる中世「府内と大友宗麟」新聞記事の連載(一〇回)・期間八月二十日～八月三十日

- ・長谷目源太(検討委員会委員長) 「まちづくりの期待 二一世紀の記念事業に」
- ・木村幾多郎(大分市歴史資料館) 「いにしえ語る古図 観光資源へ期待高く」
- ・塔鼻 光司(大分市教委文化財課) 「絵図通りの町出土 信びよう性高める」
- ・池部千太郎(大分市教委文化財課) 「大豪邸の大友館 室町将軍に肩を並べる」
- ・高畠 豊(大分市教委文化財課) 「栄えた貿易都市 多くの輸入品出土」
- ・鹿毛 敏夫(大分県立先哲史料館) 「にぎわった祇園会 山鉾巡航で最高潮に」
- ・坂本 喜弘(大分県教委文化課) 「碁盤目の町割り 京都の街並みを意識」
- ・甲斐 寿義(大分県教委文化課) 「キリシタン遺物 南蛮都市として発展」

・河野 史郎（大分市教委文化財課） 「上原館と高崎城 三層構造で防衛」

・秦 政博（大分市教委学校教育部長） 「次々と進む発掘 屈指の歴史遺産に」

大友館跡の国史跡指定を記念した事業は、以上の企画のもとに行われた。大友週間行事の内、雨天のため高崎山登山は中止となり、柞原宮宝物殿及び先哲資料館の見学に変更されたが、他の行事は予定人数を上回る盛況ぶりであった。とくに中世再発見フォーラム及び中世都市研究会では約一、〇〇〇人も参加者が県内外から集い、熱心な取り組みがひしひしと感じ取れた。また、公開シンポジウムでは、各パネリストによって、有益な提言が数多くだされた。

また、このフォーラムの機運を盛り上げ、各会場の賑わいをもし出す仕掛けとして、スタッフが着用するハッピと昇り旗をつくった。ハッピのデザインは、豊後府内の貿易品の特徴となってきた華南三彩壺（トラディスカント壺）の色と文様をイメージとして、背中に大友氏の家紋（杏葉紋・抱き茗荷）をあしらった。昇り旗は、宗麟の洗礼名フランシスコを刻した印鑑をモチーフとして、当時ヨーロッパまでその名が知られたFunaiを配した図柄とした。

#### 公開シンポジウム要旨

##### ○大友氏館跡の国史跡指定の意義等について

・発掘調査で大友氏館跡のありようがわかってきて、数年を経ずして国史跡指定に進んだことは、異例な進み方である。

それも大都市の中にあつて部分ではなく館跡全体を保護していく姿勢をはっきり打ち出す方向に進んだことはひじょうに大切なことであり、庭園を持つ大友氏館の整備は、大分の個性あるまちづくりの中で重要な空間となる。（加藤允彦）

・大友氏は、鎌倉時代この豊後をはじめとして北部九州、中九州諸国の支配をゆだねられ、いわば正統的な家系を継いで大友宗麟にいくという家系的に武士の中でも貴族的な家柄といえ、宗麟自身は文化人という色彩がひじょうに強く、

ポルトガルと結びついてヨーロッパの文化を最初に輸入したのは宗麟と言える。大友館跡から初期ヨーロッパとの直接の文化交流のさまざまな遺物が出土する可能性が高く、これからの国際化の時代に東南アジアに開かれた門戸であると同時に、日本とヨーロッパ、西欧諸国との最初の文化の掛け橋となったと言う意味で大変大きな、他に類をみない南蛮貿易都市「豊後府内」の特徴ではないか。(石井 進)

○大友氏館の保存整備・活用、まちづくりについて

・大友遺跡検討委員会も三年経過したことから今年度末までには、ひとつの総括をしなければいけない段階になっていく。これまでの戦後の政治を中心にして、あまりにも経済GNPのことだけを考えた何十年間であったといわれてもしかたがないが、これからの二十一世紀はそうではないものを中心に中心をおいた政治も市民の活動もそういう方向を指すべきである。すなわち、大友の偉大な遺産をどういうふうに分市が活用していくかということであるが、抽象的な表現であるが、ロマンと郷土ナショナルイズムだと思う。過去の歴史の中の誇れるもの、すばらしいものを現在に有効性をもたしていくことがロマン主義、今に生きるものたちの問題、それをどのように活かしていくかということが郷土ナショナルイズムだと思う。つまり、大友の遺産を最大限生かしていくためにはどうあればいいのかということが行政の全市民的な課題である。一〇年、二〇年かかるかもしれないが、行政が中心となって大友の遺産を知恵と財力、いろいろなものを結集してとりくめば必ずやれるはずであり、大分の都市像のトータル的なアイデンティティを大友の中にこそ求めていくべきで、求めていけるものであると考える。(長谷目源太)

・この事業は、歴史とか考古学を越えた大事業になる。しかしそうはいっても当面は、発掘事業の中で育児院、病院、コレジオといったキリシタン施設に明るい展望をもっていたきたい。(長谷目源太)

・ザビエルが訪れて以来、トルレス日本布教長は府内に長く滞在し、後任のカブラル日本布教長も府内・臼杵を日本布教の中心地とした。またイエズス会東インド巡察師ヴァリニャーノは日本人神父を養成するため、府内にコレジオ、臼杵に修練院を設立した。(一五八七年マカオ司教区から日本司教区は独立府内は司教座都市となる。)このように宗麟の保護・協力もあって、豊後府内が日本教会全体の中心となり、宗教的な中心都市となる。そのような意味で豊後府内は、日本に二つとない重要な都市であった。豊後府内の地下から宗教施設(コレジオなど)が出てくれば、南蛮交易都市府内の位置付けが非常にはつきりした形で見えてくる。こうした具体的なものが整ってくれば、国際化の時代にあって自分たちの生まれ育った故郷の話を堂々と自己主張できるよりどころとなる。(石井 進)

・都市工学、都市デザインといった観点からみると、近年都市に関する考え方が変わって来ている。従来の都市というのは、住む所、働く所、憩う所(レクリエーションをする所)、それらを結ぶ交通(巡る)、この四つが都市の機能であると定義され、それぞれの機能を向上させることが、都市の発展、向上につながるというのがこれまでの考え方であった。しかし、現在は、都市に生活する都市民の価値観も多様となってきており、都市の歴史を示す史跡や文化財に触れ、感じることでできる「場」としての空間を都市デザインに反映させることが、ひじょうに重要な課題と考ええる。大友の町は、幸い古絵図が残り、現在の市街図の上に復元する作業を終えているということは、こうした意味でのデザインを描いていく次のステップに進めると言う点では、大分市は山口市より進んだ段階にあると言える。(高瀬忠重)

・大友をベースとした個性あるまちができれば多くの観光客が訪れる。どこにでもあるまちをつくったのでは多くは望めない。そのまちは、いろいろな歴史も含めた都市の空間、生活環境としての空間が形成され、文化財はそうした歴



史的なものの発信の中心になるものではあるが、重要なことは、そこに住んでいる市民の方が、十分使いこなす（ま  
ち使い）こと大事である。大分市の場合は、長い先を見据えてのまちづくりをしていかねばならないだろうし、その  
中心部分に大友の遺跡があつて、館があるといった構造になることを期待する。それをつくりあげる主役は市民であ  
る。（加藤允彦）

・①庭園跡などの復元を行うとともに、大友府内町のエリアを教育文化ゾーンに設定して、文化発信センターとしての  
資料館をつくる②春や秋にはかつて栄えた「府内の市」を再現した大友河原市を大分の一大観光イベントに育てる。  
③常設の観光ボランティアガイドの部屋をつくり、ガイドの育成をする。④かつて府内には学院があつたので、大友  
氏の歴史を学校教育の中に取り入れて、郷土の歴史を学習できるきっかけをつくる。⑤上原館や高崎城を国史跡にし  
て、津久見や臼杵など大友ゆかりの地を結んだ観光ルートをつくる。⑥一般の人が、きがるに参加できるように大きな  
組織を大友遺跡検討委員会の上か下につくり、各種活動を行い大友を広めていく。（松村紅実子）

#### 市民団体との協働

大友再発見フォーラムと協働して「大友河原市」が県庁横の遊歩公園で行われた。かつて栄えた「府内の市」を再現して大  
分の一大観光イベントに育てたいとする南蛮文化と大友宗麟を学ぶ会「ふらんしすこ」の松村紅美子代表の仕掛けであつた。  
特別仕立てののぼり旗がたなびく公園に、フリーマーケットの店が並んださまは、当時の市立ての賑わいを彷彿とさせるもの  
であつた。ペットボトルで作った灯籠に夕闇迫るころ点灯され、幻想的な風情が演出された。

松村代表の執念ともいえるこの企画は、平成十五年に実を結ぶことになった。平成一一年に発足した「大友氏関連の遺跡保  
存を考える会」（大分の未来を考える会、ふらんしすこ、歴史と自然を守る会、市民サークルOCTVなどの一三団体が連携  
し、大友氏に関連する遺跡保存への機運を盛り上げ、遺跡を活用したまちづくりへの提言や大分の歴史を全国にアピールする

ために結成され、会長には加藤知弘氏が就任。)が実行委員会となり、大分放送(OBS)が企画・運営する大友河原市が大分川河川敷で行われ、大友氏館跡や府内町の復元CDの公開や出土品の展示等々、大友氏や「商都」豊後府内町の繁栄の様子をわかりやすく情報発信するとともに、さまざまな店が居並ぶ「市」の再現が三日間にわたり催され、大分を代表するイベントへと歩みはじめた。

第二〇回をむかえる大イベント大分七夕まつりにも異変がおこった。まつりのテーマにはじめて宗麟公の名が高々と掲げられた。「甞れ宗麟―二〇〇四 府内戦紙」である。記念大会となったこの夏、宗麟公をはじめとする二十三の戦紙が勇壮に駆け廻った。宗麟公が「県都大分市の顔」となった瞬間であった。

#### 大友氏関連フェスタの開催

平成十六年、大分市美術館の特別展「南蛮文化精華―ザビエル・宗麟・キリスト教」を共通テーマとして、歴史資料館、文化財課の三課が連携して、大友氏関連の情報を発信する事業を行った。

#### 内容

大分市美術館 特別展「南蛮文化の精華―ザビエル・宗麟・キリスト教」九月十七日～十月二十四日

大分市歴史資料館 特集展示「府内と宗麟の時代」九月十七日～十月十七日

文化財課 「見て 聞いて さわって知ろう 宗麟の館とまち」―南蛮の都として輝いた豊後府内

◆大友氏館跡現地説明会(県・市合同) 九月二十六日

◆上野史蹟探訪(上野台地に所在する大友氏ゆかりの地を歩く) 十月十日

◆北部九州中近世城郭研究大会(シンポジウム 高崎城をめぐる諸問題―大友の城を考える) 高崎城現地見学会十月二日

シンポジウム 十月三日

◆大友バスツアー(バスで巡る宗麟の館とまち) 九月二十九日

大友氏をテーマにして関係機関が協力して企画した初めての取り組みでもあった。台風などこの年の異常気象により、バスツアーや現地説明会など一部の企画が中止となったが、市民の反響は思いのほか高く、こうした企画の継続を希望する意見が数多く寄せられた。

### おおいた都心まちづくり計画との連携

平成十三年三月にまとめられた大友遺跡検討委員会報告のなかで、長谷目委員長は、大分市が計画する二〇一〇大分市総合計画に基づく各種基盤整備事業との調和の中で、大友氏館跡の具体的な保存整備のあり方等々、多くの課題や難問が山積みしていることも認識するなかで、今後は、歴史を活かしたまちづくりの実現に向け、数多くの課題を総合的に、また専門的に検討し、調整することのできる新体制づくりの必要性を強く述べられている。あらたな取り組みが必要となった。

おりしも「大分駅付近連続立体交差事業」、「大分駅南土地区画整理事業」及び「庄の原佐野線等関連街路事業」を三位一体の事業とする大分駅周辺総合整備事業もあらたな段階をむかえていた。南北市街地の一体化を図り、駅北商業業務中核都心と駅南情報文化新都心との役割分担のなかで、県都大分にふさわしいスケールの大きな都市空間とうるおいのある新都心を創出しようとするものである。これまでも数度の検討が行われているが、駅南区画整理事業が進展するなか、シンボルロードの整備着工もスケジュールののってきた状況から、大分中心市街地の総合的なまちづくりの視点にたつて、市民参加の議論を活性化するための「おおいた都心まちづくり会議」が、発足された。

中心市街地のなかに、大友氏館跡はあり、その保存・活用は、まさにまちづくりであり、都市計画のなかにしっかりと位置づけられ、県都大分市の「顔」づくりの創出にかかせない資産として反映させることが大切である。「おおいた都心まちづくり会議」の発足は我々にとって実にタイムリーであった。

平成十六年、教育委員会に、まちづくり会議の一セクションとして中世豊後府内の都市景観を現在のまちづくりのなかに活かし、史跡の保存整備とともに、ハード・ソフトの両面から実効的かつ適切な活用施策を検討して、その実施にむけての保存

## おおいた都心まちづくり計画との連携

### ■おおいた都心まちづくり会議（市長部局）

大分駅を中心とした南北駅前広場・道路・公園などの公共施設や中心部の活性化を検討する。

- ・ 複合文化交流施設ゾーンの整備
- ・ シンボルロードの整備
- ・ 南北駅前広場の整備
- ・ 交通結節機能の強化
- ・ 駐車場・駐輪場対策
- ・ 中心市街地の活性化
- ・ 大友氏遺跡を活かしたまちづくり

### ■大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会（教育委員会）

- ・ 中心市街地の再開発にあたり、地域の歴史と文化を知り、魅力的で個性あふれる県都大分市の「顔」づくりの創出に欠かせない資産として反映させる。
- ・ おおいた都心まちづくり会議の一セッションとして、発掘調査やこれまでの研究により得られた「中世豊後府内」の都市景観を現在のまちづくりに活かし、史跡の保存・整備とともに、ハード・ソフト両面において、実効的かつ適切な保存管理・整備活用基本計画を作成する。

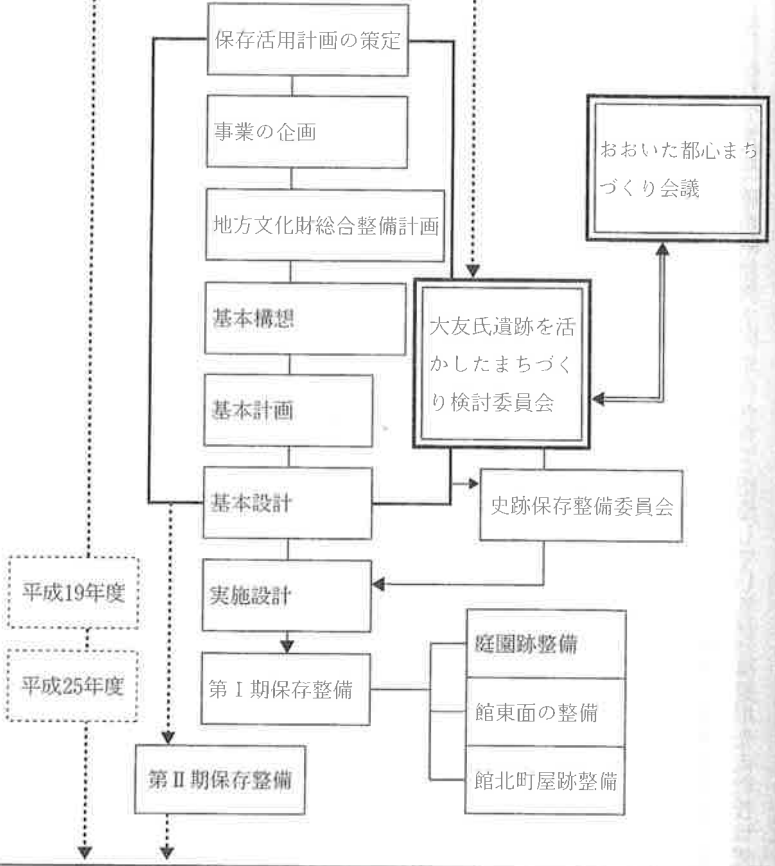
活用計画（案）の作成を目的に、「大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会」が設置された。委員会では、大友遺跡検討委員会報告に基づきながら、対象エリアの設定や整備の具体的な方向性、景観法に基づく景観計画（景観地区または景観計画区域）の指定や位置づけ等々、史跡保存整備のみならず都市整備との連携が必要であることから、学識経験者として景観デザイン、建築史・都市史、都市計画を専門とする委員を加え、他に歴史学、考古学の委員から構成される。また、市民・住民との連携から大分市商店街や若者の代表者等が参画している。

# 大友氏遺跡を活かしたまちづくり

- 発掘調査 平成11・12年度
- 国史跡指定 平成13年
- 公有化 平成14年度

大友遺跡検討委員会報告書

大友遺跡検討委員会庁内プロジェクト



#### 四、エピソード

平成十六年十一月十九日、ふたたびビッグニュースが飛び込んできた。大友氏館跡とともに菩提寺であった旧万寿寺跡の一部と北側の武家地や町屋跡が混在する地区が追加指定されることがわかった。平成十七年の春には正式に国史跡となるのとこののである。大友氏館跡と旧万寿寺地区の約一〇万㎡が指定されていくことになった。近年、中心市街地の中でこれほどの面積が史跡整備対象地となるのは全国的にもほんとうにめずらしい。大友氏の館と菩提寺をセットとする多くの人たちの願いがかなった。

「百五十名の仏僧とはなはだ収入の豊かな一字の御堂を有する。この僧院は豊後の国主たちの墓であり、このため収入に恵まれている。彼等は国主から庇護されている。」と宣教師ビレラの書簡（一五七〇）は伝え、『禪餘集』からは総門、山門、仏殿、法堂、僧堂、衆寮、鐘楼、祠堂、土地堂、風呂、西淨、雪隠、東司など禪宗寺院に特徴的な主要堂宇があったことがわかる。開創は得治元年（一三〇六）、開基は五代大友貞親、開山は直翁智侃であり、建武年間（一三三四～三六）には、十刹に列せられるなど、日本を代表する禅刹の一つに成長した。

これまでの発掘調査で、禅宗様式の伽藍が大変良く残っていることがわかってきており、全国的に事例のない禅宗寺院の初期伽藍や約三〇〇年間にわたる伽藍変遷の解明は、日本の宗教史や戦国史にはかりしれない影響をあたえるであろうし、大友氏館跡とともに万寿寺跡の保存整備は、おおいに住む人すべてのアイデンティティの創出（精神的支柱の再生）につながるにちがいない。

県都大分市は、今、生まれ変わろうとしている。戦後の復興をへて、高度成長期までの日本は、経済成長に指標を置き、効率化と平準化をめざし、全国的にまちづくりが行われてきた。確か昭和六十一年の九月と記憶しているが、故賀川光夫教授は、「豊で貧乏」は一番つらい。今の日本の国民の大部分は「豊で貧乏」なのである。それを豊だと考える私利主義の「新人類」

が文化財を支える人たちの中に顔をのぞきはじめてことは大変残念なことである。と新聞に投稿されていた。科学文明が急進するなか、人の「豊かさ」の中身を文化財行政に携わるわたしたちに鋭く問うたものであり、忘れられない記事であった。歴史や文化そして自然への軽視は、経済効果を追い求めるがゆえにおこった。これからのまちづくりは、地域の歴史や文化を配慮した、景観や環境の創出が求められている。郷土への愛着や誇りの醸成はこうした取り組みのなかで、再認識され高められると信じる。故賀川教授の言葉は、あまりにも未熟であるわたしに、遠い祖先に刻まれた遺伝子をよみがえらせてくれたのかもしれない。

個性にあふれ 奥行きとゆとりのあるまちづくりへの挑戦が始まった。

(大分市緑ヶ丘四丁目二一四)